
村

こたろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
村

【Nコード】
N3549BA

【作者名】
こたろう

【あらすじ】
地図にない村を目指す男の話。

(前書き)

評価スレッドに評価依頼中。

××県の北西部、山を二つ越えたところにある地図にない村。ネットに転がる情報の中でも本当に危ないものを取り扱うサイトで、更に『ここだけは絶対にやめておけ』という触れ書きの超危険スポットとして紹介されていた場所だ。

ここは誰でも行けるように紹介されていたのではなく、位置を示す記述が巧妙にぼかされていたのだが、俺はネット上で××県在住の人間二、三人に接触して現地のみ伝わる噂や都市伝説の類を集め、情報を照らし合わせた結果、どうやらここで間違いないだろうという場所を特定することができた。

仕事のピーク期が過ぎた十月に、遠方の親戚が亡くなったと言って、土日を含んだ四連休を用意し、木曜の定時がきてすぐに会社を出て、そのままの足で××県へと向かった。駅からバスに乗り、県郊外の〇〇市に入ったのが二十一時。真っ暗なバス停で降るされ、そこから目的地へは交通の手段がないとわかり、仕方なくタクシーを呼ぶ。

三十分程待つてタクシーがやってくる。乗せてもらい、行き先を指示するが、要領を得ない。どうも村に関しては知識がないらしい。ネット上にいた現地の間人でも実際に行ったという者はいなかったし、無理もない。わざわざこんな山奥まで足を運ぼうと考えるのは、余程のオカルト好き、それか、俺のような奴だけだろう。

暗い山道を越え、時には迂回し、三時間かけて村があると思われる平地に出た。タクシーのヘッドライトも意味をなさない一面の暗闇だったが、携帯の位置情報を見るにここで間違いない。万の桁に達した料金を支払い、車外に降りる。俺は運転手の帰り道を心配したが、知らない土地であっても来た道を帰ることならできると言われた。プロは違う。

鞆一つのスーツ姿で暗黒の中を進んでいく。一応足元だけは携帯

で照らすなどして注意を払う。しばらく行った先で、目が暗闇に慣れてきた為か、古い家屋らしきものがいくつか視認できるようになった。どこからも灯りはないので無人かと思うが、俺の読み通りならそれは違う。

一軒の、この距離で明らかにあばら屋とわかる家の玄関を叩く。戸に付いたガラス窓がうるさく鳴った。しばらくの静寂の後、突然に戸が開き、背の低い老婆が目の前に現れた。

少し身を引いて、「あの……」と言いかける俺を余所に、老婆はそのまま家の奥に入っていく、廊下の角のところで小さく手招きをした。俺は小さな玄関に身を入れ、戸を閉めて、靴を抜いでからそれについて行く。

最奥の十畳の部屋に、下は五つから上は十五、六と見られる着物の少女達が五人、蝋燭の灯りの中、床で双六などを散らかして遊んでいた。俺に気づいて、全員が顔を上げる。

「好きにしていよいよ」横で老婆が言った。

俺はまず年長の少女から始めて、徐々に幼い娘で遊んでいった。彼女達は一人も、会話となるような言葉を発しなかった。教育を受けていないのだろうか。外国で売られている娘と変わらないなと思った。

その晩はその家に泊まることにした。老婆が俺の為に食事を作ってくれて、少女達が雑魚寝をする中食べて、寝た。

翌朝、朝食をご馳走になってから、老婆に三千円を支払って家を出る。財布にはその百倍を用意してきたので拍子抜けした。廊下の奥から、昨晚の少女達がこちらを見ていた。俺が手を振るとすぐに引込んだ。

村は、同じような木造あばら屋が三十棟程の規模だった。周囲を山に囲まれ、電線はなく、畑があちこちに見える。やはり肥溜めもある。昨日は最低限足元を注意していて良かった。

村を軽く一周したが、見る限り男がいない。成人と呼べる女の姿もない。農作業をするのは皆老婆と、昨晚のような若い娘達だけだ。

庭先で遊ぶ十二、三ぐらいの少女に惹かれて、俺は村の一番はずれの家に入った。

その家の老婆に、昨日のように奥の部屋へと通された。座って待っているとすぐに先程の少女がやってきた。おかつぱ頭で、土汚れした着物、やはり言葉は発さず、怯えているようだったが、こういう娘の扱いには慣れている。

行為を終えてくつろいでいたところに老婆が昼食を持ってきたので、頂く。質素な純和食だ。娘には携帯を与えていた。部屋の隅で、内蔵のパズルゲームに夢中のようにだった。

「風呂が沸きましたよ」

ちようど食べ終わる頃に、老婆が手拭いと着替え用の着物を持ってきた。

「この娘も入れていいか」

「ええですよ」

娘を連れて、廊下の先の木桶風呂に入った。気を許してきたのか、風呂桶の中で抱きつくような格好になった。髪の間指を入れて撫でると、笑う。

風呂を上がって、娘のからだを拭く。おとなしい。

新しい着物も着せてやった。俺も同じ藍色のものを肌纏い、一緒に元の部屋へと戻る。

「今夜はここに泊まるが、それまで外出してもいいか」

老婆は頷いた。「好きにええですよ」

玄関で靴を履いていると、娘が俯いて何か言いたそうにしているのに気づく。俺はふと思いついた。

「この娘も連れて行っていいかな」

老婆は微笑んで「どうかそうなさって下さい。人見知りをすることで、庭から一步も出さず困っております」

娘を連れて村中央の家に入った。その少女三人に、村はずれの娘を混ぜて奉仕をさせた。終わって老婆に千円を払い家を出る頃には、娘たちはだいぶ打ち解け合ったようだった。

「これで」もう千円を渡す。「この娘を一日泊めてやってくれ」
老婆は快く了承した。

元の村はずれの家に戻って老婆に事情を伝えた後、就寝。

翌日も翌々日も村の娘を買って過ごした。携帯のパズルゲームは人気だったが、途中で充電が切れてしまった。次は必ず予備バッテリーを持ってこよう。

月曜の午後、結局最後まで世話になった村はずれの家に一万円を入れた。老婆は何も言わずに受け取った。

「また来るよ」と娘の頭を撫でる。すると脚にしがみついてきた。

「連れて帰られては駄目ですよ」老婆が言った。俺は小さな手をほどいて引きはがし、踵を返してそのまま村の出口へ向かった。

各家から老婆と娘たちに見送られた。俺は手を振るだけで、歩みは止めなかった。

村を出て、山道を徒歩で下った。ここにきて疲れが最悪だ。やはり予備充電は要る。

木々で周囲が見えない程だが、足元に道はしっかりとある。日が落ちる前に街灯のある場所まで出られればいいが。

一帯の暗みが増して焦りを感じ始めた頃に、前方から懐中電灯の光が近づく。俺は安堵した。

現れたのは袈裟を着た僧だった。驚愕の顔をしていた。

「あなた、まさかこの先の村に行っていたのでは」

俺は「そうだけど」と答える。僧はますます青ざめた。

「そこで誰かに会いましたか」
「会った」

僧は震える声で言った。

「あそこは死者の村と呼ばれる場所です。江戸時代の、淫売を育てる隠れ里であったのが、明治維新の性風俗抑圧によって維新政府に存在自体を亡くされ……村ごと焼き払われて……。私は今からそこに年一度の御供養をしよう……。ですから、あなたが会われたの

はきつと……」

僧は頭を抱えた。

こいつ、細かいな。そんな風に生きていて楽しいか？

俺は言う。「いいから携帯を貸してくれ。タクシーを呼ぶから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549ba/>

村

2012年1月9日05時03分発行